

西垣通論

和田 勉

一

西垣通は東京大学情報学環教授として、『基礎情報学——生命から社会へ』（平16、NTT出版）『情報学的転回——IT社会のゆくえ』（平17、春秋社）等の情報学・メディア論の著書も多い。一方で小説の著作も並行して行っている。本稿では西垣の小説の中で、生命科学に関わる作品を中心に考察したい。具体的には、『刺客の青い花』^{テロリスト}（平12、河出書房新社）、『サイバーペット／ウェブ生命情報論』^注（平20、千倉書房）について、生命科学との関わりを中心に解明したい。生命科学の要素を小説の中に取り込むことの意図や効果、及びその評価等についても言及する。そのことよって、西垣の小説の可能性や限界も自ずと明らかになるはずである。なお、西垣についてのこのような視点からの研究は、従来ほとんど為されていない。

これらの小説の他に、『1492年のマリア』（平14、講談社）

は、新大陸発見を目指したコロンブスの航海とスペインでのユダヤ教徒迫害を扱った歴史小説である。ここでは宇宙や宗教などについて記されているが、生命科学的な要素は盛り込まれていないので、本稿では詳しくは取り上げない。また『アメリカの階梯』（平16、講談社）では、信吾郎は息子作夢に、「人間の躰は六十兆個もの細胞から出来ている。おまけにその個々の細胞そのものが自律して活動しているのだ。細胞の構造自体は、十数億年も前に出来上がった、比較的単純なもの。だがそれらの細胞活動の驚くべき組合せの仕方によって、進化史上、実にいろいろな生物種が現れ、また滅んでいった。われわれホモ・サピエンスもその一つ。だからわれわれの生殖活動も摂食活動も、それら細胞の込み入った活動の組合せに過ぎぬのだ。とすれば、われわれの心を横切る欲望とはいったい何なのだろう」と語る。『アメリカの階梯』では、昭和十年代を背景に、日本とアメリカのはざままで翻弄される主人公作夢の姿が描き出される。作夢は父信吾郎とアメリカ人女性との間に生まれたのである。戦時下ではスパイと間違われかねないのである。この作品にも生命科学的な要素はほとんどないので、本稿では詳しくは触れない。

西垣は『聖なるヴァーチャル・リアリティ』（平7、岩波書店）の中で、「DNA二重螺旋モデルは生物と情報の不可分の関係性を明るみに出したが、二〇世紀後半になると、両者の結びつき

はいつそう深く研究されるようになった。今では、生物なくして情報は生まれず、情報なくして生物は存在しない」と述べている。また『情報学的転回——IT社会のゆくえ』の中で、「人間の体は六十兆個の細胞でできています。生命史四十億年のなかで、多細胞生物ができたのはほんの九億年前です。それまでは単細胞生物ができたのはほんの九億年前です。それまではもちろん役割分担はあるけれども、それは自然発生的に、つまり内部的な相互調節によってできてくるもので、外から天の下りに設計され定められたものではない。だから、ガン細胞が異常発生したりするわけです。オートポイエーシス理論^{註2}というのは、まさにそこを突いている理論です。細胞が世界を認知して、それなりに生きようとする。それなりに進化に参加しようとする。その部分をとらえた理論ですね。私が主張している情報学（基礎情報学）は、オートポイエーシス理論をベースとしているもの」と述べている。これらの内容は、西垣の情報学が生命科学と密接に関わっていることを示している^{註3}。

ところで、文学と情報との関わりについても、小説『ゴズミック・マインド』（平21、岩波書店）を中心に検証したい。情報学者が小説という形式を用いているが、その戦略や功罪についても言及したい。それは、西垣の表現思想の根幹について追尋する試みと言い換えてもよい。高度経済成長以降の日本においては、人々が情報社会の中で生きてきたので、現代の文学

を考える上で、こうした情報優先の状況が文学にどのような影響を与えているかという側面を洗い出すことも重要な作業となるはずである。

二

まず『テロリスト 刺客の青い花』^{テロリスト}について見ていく。この作品では、太平洋の真中にある「海の植民地^{シコロニア}」を舞台にストーリーは展開する。そこは、遺伝子操作されて不要とされた生き物たちのいる中米の小さな国である。

登場人物に即して、生命科学的な言説との関わりを見ていきたい。まず主人公の幻児は「高性能の戦闘生体機械」であり、目的のためには他人の命を奪う非情さを持っている。幻児は裏通りで見かけた人たちについて、「大半はおそらく、スポーツ選手用の遺伝子操作で生まれた失敗作だろう。遺伝子によるスポーツ選手の改良は国際法で禁じられているので、証拠隠滅のため、海の植民地^{シコロニア}に捨てられた」と思う。幻児は「今のような遺伝子工学全盛の時代に、『普通の人間』なんて存在するのだろうか。『利己的遺伝子^{セルフイッシュ・ジーン}』という呪いは、けっこう強力」とも思う。遺伝子操作が主流の中で、従来の利己的遺伝子という呪縛は強いが、それに囚われている状況ではないと認識するのである。断種されて子孫を残せない幻児にとつて、遺伝子を後

世に残すということは切実な問題である。最終的には幻児は、個々の命が遺伝子の呪縛を乗り越えていく可能性もあると思う。それは「エピソード」の中の「未だ、あの生命哲学に捉えられている。——『個々の命とは信号そのもの。懸命に声をあげるメッセージ。子々孫々に伝えられていく遺伝暗号は、個々の命とペアの関係にある』。にもかかわらず……個々の命は、遺伝暗号を力ずくで乗り越えていく可能性ももっているのではないか」というようなところに示されている。表題の「刺客の青い花」には、テロリスト幻児の遺伝子操作・生命操作にまつわる叶わぬ願望が込められている。「青い花」は自然界には存在せず、遺伝子操作によってのみ可能であるが、果たしてそれが常態化して良いのであろうかという批判が託されている。

犯罪の嫌疑をかけられたスコット（表の顔はジェームズ博士）は、刑事のイカリやモーツァルトに向かつて、「君らにどれだけ遺伝子工学の知識があるのか知らないが、もはや最先端の研究では、人体組織を合成することさえできるんだよ。分裂しはじめた受精卵から核を除いて、そこに患者の体細胞から取りだした核を移植する。胚性幹細胞のクローンだ。ありがたいことに、卵細胞を提供してくれるボランティア女性くらい幾らでもいるからね。するとどうだい、肝臓だろうが心臓だろうが、お望みの人体組織を培養できるんだ。それを患者に移植しても拒絶反応はまったく起きない。何しろ、自分と同じゲノム、つ

まりDNA遺伝子を持つているんだからな。高価な免疫抑制剤もいらなくなる」と述べる。生体から臓器を奪うというような犯罪に関与しなくても、必要とする臓器を培養して提供できるというのである。遺伝子工学によって人体組織を培養できるというメリットを語る。このようなメリットを強調するのは、スコットが所属する人間組織^{ヒューマン・ティシュー・ロセツシグ} 処^{エンジェル・ファーム}理の研究開発企業「HTPG」の活動を正当化するためである。スコットは裏では、臓器密売と人体加工ビジネスで儲けている。しかもスコットは、遺伝子操作による自己の子孫繁殖を孤児院「天使農場」で行つてもいるし、人体部品取引禁止条約を目指す大統領暗殺を幻児に指令もしている。

スラムの住人を救おうとする娘ミンは、遺伝子工学の負の側面として、失敗のために惨めな状況に置かれている人たちを目標とする。「うまくいったケースは華やかに宣伝された。ハンチントン病だの、重症複合免疫不全症だの、嚢胞性繊維症だのとといった難病のたくさん患者が、遺伝子治療のおかげで救われた。（中略）『二十世紀は原子力をうんだ物理学の世紀、二十一世紀は遺伝子操作をうんだ生物学の世紀』というスローガンの、飽きもしない繰り返し。全くおっしやる通り。だが超一流先端技術は、悪徳や残酷さともなぜか仲がいい。海の植民地^{シーコロニー}ではありとあらゆる実験が行われている。スポーツ超人、数学的天才、チェス名人、セックスペット、さらには不老不死まで

……。途方もない額の金が動くなかで、ビッグ・ビジネスはたくさん失敗作をもひそかに生みだしていく」という状況を思い知らされる。「生命自然な流れからむりやりはじき出されてしまった」可哀想な人達を救いたいとミンは考える。

ミンは、「自分の思いこんでいる堅牢な世界とは実は脆い虚構であり、遺伝子や脳神経の、限りなく多様で偶然的な歴史が織り上げる奇妙な出来事の一断面にすぎないことを、いやでも思い知らされることになるのだ。人間の社会とは、その程度のものであること。三十八億年からの生命進化史そのものが、荒々しく無目的な自然のエネルギーの暴走にしか過ぎない」と思う。人間の知性的な側面よりも、生命進化史の偶然的な要素の方が大きいという考えを持っている。ミンは「DNAゲノムが、人間の未来を縛っている」とも思う。それは、三十八億年の生命の流れを切実に実感として理解しているということである。鳥族の出身であるミンの母は、ミンが幻児と結婚する運命にあるという謎めいた言葉を残して失踪しており、ミンはその使命を果たそうとする。

海の植民地^{シコロニ}の支配者鵬々、別名Qは、鳥一^{シコロニ}天族の出身である。「ウイルスや細菌も人間と同様、DNA遺伝子の大海のなか、必然と偶然のあわいで、必死に未来へ向かって泳ぎ続けている」と、幻児やミンに向かって述べる。鳥族の生き残りの鵬々は、ウイルスや細菌でさえ遺伝子として生き延びようとしてい

ると言うのである。また、「若くして息絶えた鳥一^{シコロニ}天族の娘たちの卵巢をもとに、大規模な遺伝子ビジネスを展開した」ことを告白する。それが鳥族の遺伝子を後世に残す方法だったと自己正当化する。

『刺客^{テロリスト}の青い花』は、前衛的実験的な試みがなされた作品である。遺伝子操作が日常化した近未来社会の負の側面を見事に照射している。「海の植民地^{シコロニ}」という架空の空間の設定も巧みである。ここでは、「市場経済と情報技術と遺伝子工学との輝かしき成功の暗い裏面」が剥き出しにされている。悪徳が世界中からもたらされる空間として、適切な場面設定であると言える。

ただし、エンターテイメント性の強い作品として書かれているので、作品自体を高く評価することは難しい。それは、アクションの要素が強いからということだけでなく、登場人物の人物象が十分に為されていないことにも因る。脇役のイカリやモーツアルトやスコットやミンなどの造形に、それは特に露わである。イカリやモーツアルトの人物造形が不十分なのは、国際連合の下に置かれた連邦警察官であるという設定の難しさにも起因するだろう。「警視庁きつての敏腕刑事だった」イカリとか、「ドイツ警察からの派遣者」モーツアルトなどの説明はあるが、具体的な人物象として形象化されているとは言い難い。娘のミンにしても、幻児を助けるほどの能力をどうして発

揮できたのか、説明が不十分で分かりにくい。それらはストーリー展開の不自然さに起因するのみならず、登場人物とその台詞を含んだ言動にエピソードなどを含めた個性の描出が乏しいことにも因るだろう。

ところで、主人公のテロリスト幻児については、実は大幻の遺伝子を体内に持つ複数の人物、つまり「受精卵クローン」のニックネームに過ぎないという展開の仕方は独特である。鳥族の夢児が、大幻の長男のような立場で遺伝子を後世に伝える役割を荷っているというのも、神話的な展開である。なお、大幻は鳥―地族の首長であるという説明がある。

少数民族は、人跡まれな険しい高山に住むから鳥族と呼ばれている。Qの語る「鳥―天族」と「鳥―地族」というところ、つまり天族の末裔のミンと地族の末裔の幻児が結ばれることの重要性を説くところは、神話的であると言える。また、鳥族の子供たちの内臓は遺伝子ビジネスのために利用されたところとは、生命科学的な知見を踏まえた未来予測的な内容となっている。

『刺客の青い花』^{テロリスト}では、遺伝子操作の技術が進むことが、果たして人類の幸せにつながるのであろうかということが寓話として問われている。このような近未来小説の場合、時代を予測する能力が重要であるだけでなく、作家の想像力が現実社会を撃つだけのものをどれだけ獲得し、説得力をもって表出し得て

いるかも重要であろう。遺伝子に刻まれているかもしれない神話的な内容を、生命科学的なりアリティも盛り込みながら展開しており、独自の小説世界となっている。神話的な内容と生命科学的な内容によってスケールの大きな物語となつてはいるものの、両者が乖離し過ぎているという側面も指摘できよう。

この作品には、嗜虐趣味とも思われるグロテスクな光景の描写も散見されるが、必ずしもそのような露悪的な描写が必要ではないと思われるところもある。また、小説の中に描写ではなく説明的要素が目につき過ぎることも、否定的要素として指摘できる。作品内の整合性を保とうとして、説明に頼ろうとしているのである。

次に『サイバーペット』について見ていく。この作品では、遺伝子組み換え技術による新たなペット作りへの懐疑がテーマとなつている。『ウェブ生命情報論』の中でも『サイバーペット』について自作解説しているが、ここでは「今の調子で遺伝子操作技術が進展していけば、遺伝子組み換えペットが流行する日は遠くない」と述べている。このような危惧が『サイバーペット』には反映している。

主人公多々納蔵人は中学生相手の塾の英語講師である。独身で引きこもりがちであり、猫のサイコを相手に一人言を呟く癖がある。女医で強圧的な平先生が母親なので、卑屈な少年時代を送った。マザーコンプレックスの少年は不登校になり、引き

こもりにもなった。生命の尊厳が侵害されることに極端に怯えており、生物と機械の違いを明確にすべきだということに固執している。そのために、生き物を情報システムとして扱うことを極度に嫌っている。「ただのくろうど」という名前には、平凡な雑務処理にふさわしい人物ということが寓意^{注4}されている。

生物研究家のベルデなどのブログを多々納が見るといふ展開になっており、ブログの内容を引用して重層構造とすることで、作品としての効果を上げている。多々納のネット上の名前はナイチンゲールであり、看護師を指している女性という設定にしている。多々納はなりすましで匿名のまま、他者と交流することになる。一方、ベルデは性淘汰にまつわる鳥の進化シミュレーション・ゲームに強い関心を示し熱中している。

第6章「ペットライフ・アソーシエイト」のベルデのブログには、「DNAの二重らせん構造が発見されてから、分子生物学がすごく進歩したことはナイチンゲールさんだって知っているわよね。たとえばヒトゲノム計画なんか、テレビや新聞でもくりかえし報道されているけど、興味ないかしら。あれば人間の全遺伝情報をコンピュータで分析する研究のこと。ヒトゲノム計画だけじゃなくて、いろいろな生物の遺伝情報メカニズムをコンピュータを駆使して研究するプロジェクトは、いま世界中で掃いて捨てるほどある。私の進化シミュレーションもそのささやかな一分野」とある。ベルデは生物とコンピュータが、

情報システムとして極めて似ていると捉えている。つまり、生物は情報処理をしながら生きている存在だから、コンピュータと同様に扱えるというのである。特にペットの品種改良は、進化シミュレーションのブログと密接に関わっており、まさに表題の「サイバーペット」につながるのである。

第6章「ペットライフ・アソーシエイト」のグラス社長のブログには、「DNA遺伝情報は記号がA、G、T、Cの四つ（四種類の塩基）で、コンピュータのように0と1の二つ（二種類）ではないとはいえ、本質的にはおなじデジタル情報だ。こうしてそれぞれの生物は、リアル空間だけでなく、サイバー空間の存在としてとらえ直される。すべての生物は情報的存在として輝かしく進化する。遺伝子はサイバー空間でかぎりなく自由な展望をえる。そこにこそ、ITと結合した地球上生物の未来がある。われわれホモ・サピエンスもけつして例外ではない」とある。ペットライフ・アソーシエイトの社長であるグラスは、ペットの品種改良を遺伝子操作によって行っており、それを商売にしている。そのため、遺伝子組み換え生物の取り扱いについての規制^{注5}を、もう少しゆるめるべきだという考えを持っている。

第7章「宣戦布告」のナイチンゲール（＝多々納）のブログには、「分子生物学的な遺伝子組み換え技術というのは、まったく次元のちがう操作ですよね。あの技術が最初にあらわれた

のは、三〇年あまり前だと学校で教わりました。うろ覚えですけど、ある生物の遺伝情報をウイルスのなかに取りこんで、そのウイルスを宿主となる別の生物に感染させる、そうするとウイルスは宿主の体内で爆発的にふえて、ついに宿主の遺伝情報を変えてしまう。たしかそんな技術だと思えます。この遺伝子

組み換え技術はいろいろ役に立っています。人間の遺伝子を大腸菌のなかで働かせて、本来は人体のなかでしか作れないインシュリンというホルモンを合成するのはその一例。これで糖尿病の治療はとてラクになりました。このほかにも遺伝子組み換え技術はいろいろ役に立つことがあるそうです。人間の成長ホルモンの遺伝子を孵化場の養殖魚の卵に導入して、魚の成長速度をはやめることもできるらしいですね。いろいろな生物種のあいだで遺伝情報が共有されているというのは、ほんとうに驚くような事実です。わたしは決して、遺伝子組み換え技術の利用を全面的に否定しようとは思いません。ただ心配なのは、使い方をあやまるとおそろしいことを引き起こしはしないか」とある。表題の「宣戦布告」とは、ナイチンゲールがグラス社長の生き方に、ブログ上とは言え敢然と挑戦するということがある。自然を尊重して生態系のバランスを壊さないようにすべきというのがナイチンゲールの考えである。グラス社長の唱える遺伝子組み換え技術で、ペット生物を造り出すということには、断固反対の立場である。内向的な多々納と攻撃的なナイチ

ンゲールは、同一人物でありながら二重人格とも言えるギャップを示すことになる。

第8章「サイコの失踪」では、飼い猫の失踪で、多々納は気が動顛してしまふ。「人間は、動物や植物を勝手気ままにあつかっている。品種改良と称して、自分たちの都合のいいように交配させたり、生物種を変化させて新種をつくりだしたりする。食料にするためならある意味で仕方がないが、愛玩用のペットとして売るためにそういうことをする連中がいる。これはぜったいに許せない。とくに最近では、DNA遺伝情報を操作して、おどろくような新種をつくりだそうというバイオ・エンジニアリングの企てもあるようだ。コンピュータ工学と分子生物学の研究がむすびついたプロジェクトだ。もうかるビジネスらしいが、何とおそろしいことだろうか。生態系そのものが狂ってしまうかもしれない。それに何より、僕たち人間も動物や植物とおなじように一種の生命なのであって、生命をオモチャにしてはいけない」と多々納は授業中に生徒の前で演説してしまふ。多々納は次第に現実と妄想、つまりリアル空間とサイバー空間の区別がつかなくなっていく、ブログ上で言いたい放題だったナイチンゲールが乗り移ったような存在となってしまう。このようなシーンにおける多々納は、現実と妄想の区別がつかなくなっているが、それが果たして人物像としてどれ程のリアリティを獲得しているかが改めて問われねばなるまい。

またこのような単純でストレートな人物は、主人公として魅力あるキャラクターであるかどうかとも問われねばなるまい。もつとも作者の西垣とすれば、意図的にこのように卑少な自我の青年を主人公とすることで、生き物を情報システムとして捉える風潮に命懸けで抵抗する引きこもりがちの青年の姿を描き出すとしたのであろう。

第1章「プロローグ」では、拘置所にいる多々納の、人生についての哲学が記されている。世間から異常というレッテルを貼られたが、本人は正常だと信じているのである。これに対して結末の「付記」では、世間から異端の扱いを受けた主人公を弁護人の視点から相対化し、擁護する立場から綴られている。中央部では、このような異端の人生を送った主人公についての詳細が語られることになる。これらの構成には、太宰治『人間失格』の「はしがき」と「あとがき」からの影響も窺える。どちらの作品でも中央部に記された主人公について、相対化、客観化して捉えようという意図が窺える。「神様みたいないい子」（『人間失格』）とか、「完全に狂っているのは、むしろ世の中のほうなのだから」（『サイバーペット』）と主張しようとする意図である。人間社会からは失格者の烙印を押されたが、必ずしもそれは妥当ではないと正当化しようとする目論見である。ただし『人間失格』では主人公葉蔵に託した太宰の人間社会に向けた強いプロテストが示されているが、『サイバー

ペット』ではそのようなインパクトは乏しいと言える。それは主人公多々納が殺人犯の割りに、リアリティに欠けることにも起因していよう。

『サイバーペット』では他人のブログを随所に効果的に挿入することで、顔の見えない他者とのやりとりが臨場感をもって表出されている。結末近くで多々納が雲井母娘を殺害してしまう内的必然性が説得力をもって表出されているかどうか、この作品の評価において最も重要だろう。殺人の動機として、生命操作反対というあくまで観念的な理由が記されているところに物足りなさが窺える。倫理的、道徳的なことをブログに記していたナイチンゲールの考えが多々納に乗り移り、遺伝子を扱って生命操作をするベルデ（実はグラスや雲井翠やXと同一人物であることが後で分かる）を許せないと思うところである。つまり、「人間をいわば『サイバーペット』にしてしまいう風潮にたいする抵抗として、確信的にあの事件を起こした」（『エピローグ』）というところである。このような観念的な理由以外に、ペットを勝手に手術されたことへの復讐も記されているが、いずれにしても殺人の動機に乏しい。被害妄想的な資質があることは認めても、行動に移す動機としては弱い。「あなたを殺すという僕の行動は、人為淘汰じゃなくて、自然淘汰なんだ」とか、「オレは殺したんじゃない、情報空間から『削除』したんだ」と思う多々納の人物像について、説得力に欠け

るのである。西垣の意図としては、「エピソード」に記された「思想的・哲学的な問題」を提起したのであるが、それが読者に納得されるように表出されているかどうかが改めて問われる¹⁴⁾。

『サイバーペット』では、テーマとの関連で嗜虐的なシーンも随所に描かれるが、それが露悪趣味とも取られかねないところも窺える。それは生命操作や電脳空間等という背景の状況に起因するだけでなく、作者の感性そのものに起因するところも大きいと思われる。西垣にすれば、ブログ上の知的な論争の一方で、日常における残虐さを強調しようとしたのであろうが、両者が必ずしも融合しているとは言い難い。

三

情報学の専門家である西垣が小説を書いている故の長所と短所について見ていきたい。西垣の小説について考察することは、現代において文学は情報とどう関わるべきかということを検証する上でも極めて示唆的である。それを検証する上で最も有効な作品が『コズミック・マインド』であるので、この作品を中心に考察したい。

『コズミック・マインド』では、コンピュータ社会における情報操作などがテーマである。コンピュータ関連の企業に勤め

る人達が、プログラムと格闘する姿として描き出されている。ただし、それはプログラムの論理にウエイトが置かれており、プログラムの誤作動への不安に振り回される姿として表出されている。主人公庸三は、IT関係のソフトウェア開発のエンジニアである。倉光銀行に向かい、オンライン・システム設計のプロジェクトリーダーを務めたことがある。現在は倉光銀行と住菱銀行の合併に関連して、「銀行統合に付随するオンライン・システム結合という作業の過酷さ」に直面している。地方銀行が大手銀行に吸収合併されることになり、オンライン・システム統合のために高度なIT能力が必要とされる。そこに、隠し口座処理などの問題も絡んでくる。倉光銀行の特別手数料徴収処理プログラムは違法であるため、両銀行のシステム統合の際に問題になるのである。

表題の『コズミック・マインド』とは、庸三が「もし絶対知¹⁵⁾を有する宇宙意識¹⁶⁾が無いとしたら、人間はいつたい自分を、天地のなかのどこの座標点に位置づけなければならないのか」と思うようなところに顕著に示されている。万物の活動を統括する神のような存在が「コズミック・マインド」だといっているのである。庸三は「膨大な絶対知をつかさどる、宇宙意識¹⁷⁾のようなものを、未来のコンピュータとして思い描く。それは梓も同様で、コンピュータの技術革新が進んでいけば、やがて宇宙意識¹⁸⁾に近づく¹⁹⁾ということを考える。この作品では、庸三のみならず梓も、コ

ンピュータシステムを宇宙意識コスミック・マインドと捉えているところが独特である。だが、果たしてそれが読者にも共感を持って受け入れられる内容として表出されているかという点、必ずしも十分とは言えない。それは、コンピュータの未来像としてあくまで推測されているからという要素も大きいと思われる。

ところで、『コズミック・マインド』では、ヒトの活動もコンピュータのプログラムとして捉えている。それは庸三が「人間も一種の機械だ。年齢をとって少しずつ壊れていくコンピュータ」と思うところや、「コンピュータのなかの闇と、人間の記憶のなかの闇とはどこか似ている」と思うところに示されている。あるいは、梓が「絶対知をつかさどる宇宙意識コスミック・マインドについては」「人間の脳は不完全ながらその一部分をになうハードウェア」と思うところや、梓が黒部について「機械的処理の権化というか、コンピュータにスーツを着せたような人物」と捉えるところにも示されている。

なお、『コズミック・マインド』における生命科学的な要素としては、庸三は梓に、「エビも人間も、しよせんは同じ古代生物から進化した親類でしょ。遺伝子もけっこう共通してるって、こないだテレビで生物学者が言ってた」と語る。進化の系統樹から見れば、魚類も哺乳類も近親ということである。二人の話は、あらゆる生命体は運命とか因果というような宇宙的なプログラムにコントロールされているという方向に展開してい

く。また、梓は麻梨亜のアトリエで遺伝子に刻み込まれた生物進化の記憶をモチーフにしたような作品を見せられて、「たしかに私の身体をつくっている遺伝子も、太古から綿々と伝えられてきたDNA情報でできています、身体という物質が減びても情報は未来に生きのびていく。情報の記号をになう物質はシリコンだったりタンパク質だったりしますが、情報の意味そのものは物質ではありませんから」と語る。DNAについて、宇宙的な広がりを持った記憶再生装置だとも思う。

この作品にはかなりの登場人物がいるが、主人公の庸三及び副主人公格の梓とその先輩朱実を除くとほとんどの人物が魅力に乏しいし、印象に残らないような固有名詞もある。例えば、倉光銀行の額田室長や黒部プロジェクトリーダーや住菱銀行の榊専務等である。銀行口座の金額に執着する「額田」や隠し口座の黒幕的存在である「黒部」という命名の寓意性は認めても、人物としての印象は薄い。これは情報が主で人間は従という作品のテーマには即していても、小説の在り方として問題を残している。読者は小説の中の情報に引き込まれるというよりも、登場人物の言動に引き込まれるのであり、それらが巧みに表出されているかどうかを改めて問われる。情報や金融に関わって生きる人々を描いてはいても、そこに心理についての描写は希薄である。金融の情報に振り回される人達の狼狽が描かれているので、それは心理を描いていることにつながるとも言える。

それにしても、情報や金融が心理描写に代わる小説の役割を担っているとまでは言えまい。ここから逆に、情報化社会における文学の存在意義をどのように再構築するかが改めて問われよう。

情報学者である西垣は、情報関係の専門書では理詰めで論理的に所説を展開する。この傾向が西垣の小説にも見られるが、作品にプラスに働いているとは必ずしも言えない。それは、特に形式的で通俗的な台詞に指摘できる。内面に思っている言葉で伝え難い場面なども、もう少し多用しても良いと思われる。またコンピュータと同様に論理的に文章を綴っており、言葉の多義性も意識的に排除されている。しかし、そのことによつて作品として効果を上げているとも言えない。

四

西垣は『基礎情報学——生命から社会へ』の中で、「ヒトを他の生物から切り離された特権的存在と見なす思考は批判される。これは、分子生物学や進化生物学の近年の成果をふまえたアプローチ」と述べている。分子生物学等の成果を踏まえて、ヒトを生命情報（情報）の視点から相対化して捉えている。しかも、生命情報は生命の発生と共に誕生したというのである。

西垣は情報学の知見を踏まえて、小説というフィクションの

形式を用いて、自己の思想や主張を展開している。高度に発達した科学技術が社会や人間に新たな不安や恐怖を与えているという確固たる認識が、西垣にはあると思われる。それは日常の現実社会の中に、自然には存在しないものが科学技術によつて持ち込まれているという危惧（おそ）である。特に、現代を遺伝子操作による生命危機の時代と捉えて執筆活動を行っている。科学技術がもたらす解決しがたい負の側面を、小説の形で強調したイメージで描いて読者に提示することによつて、危機意識を喚起している。リアルタイムの問題を先取りしながら執筆していること自体は評価できるが、小説としてのリアリティや臨場感に課題を残している。作者と作品をつなぐ臍（へら）の緒的な要素、つまり原体験のようなものに裏打ちされていないのである。そのことが作品が頭脳によつて作られた印象を強く与えて、読者の心に届く際に必要なリアリティや説得力の欠如につながっていると思われる。作品内に主人公と対峙・拮抗するだけの強い他者が希薄なことも、作品全体が作者による予定調和的なストーリーという印象を与える要因だろう。〈死〉の捉え方にしても、『サイバーペット』に見られるように情報空間から削除したというようなことでは認識として問題を残しているよう。

各登場人物が型にはまった言動をするところもあり、そのたゞめ意識と無意識、精神と身体等の葛藤が、必ずしも十分に表出されているとは言えない。各登場人物に固有のアイデンティ

テイが、いかに獲得されているかということも改めて問われよう。もともと西垣からすれば、情報化社会に生きる「ヒトの心」を一種の『情報処理機械』とみなす」（『このころの情報学』、傍点本文）という視座から人物造形が為されているところもある。つまり「自己」が「自己」であり、「主体」が「主体」であると言いつける時代は終ったという認識である。その当否はともかく、コンピュータと重なるところからヒトの心を捉えようとしているところに、西垣の独自性と共に文学としての限界も示されているよう。

勉 西垣の小説は形而上学的、生命科学的な要素がある。それ故観念的でもあり、読者にとっては難解であり、読者を引き込む要素に欠けているものがあるとも言える。時代の最先端を行く興味深いテーマに関心を示しているだけに、登場人物の描き方や台詞のリアリティや心理描写の細かさなどの表現手法が、したたかで老獪であることが求められよう。

有機的なシステムであるという自己創出理論。

注3 『このころの情報学』（平11、筑摩書房）の中でも、「生物学者リチャード・ドーキンスは、『生物個体は遺伝子の乗り物にすぎない』というあの有名な利己的遺伝子説によって人々に衝撃を与えましたが、情報系という観点からみれば当然のことを言ったにすぎません」と述べており、『ウェブ生命情報論』の中でも、「分子生物学は、DNA遺伝情報を分析することによって、ヒトとその他の動物との強固な類縁関係を立証した」と述べている。

注4 『ウェブ生命情報論』では主人公について、「自分の存在感がぎりぎり希薄になっていくように、自らの凡庸な様子が完璧に仕上がるようにと、たくみに工夫をこらす」人物と説明されている。

注5 「カルタヘナ法」（遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律）については、事実を踏まえて記されている。作品中には意図的に「数年前にできた」と記されているが、実際には平成16年より施行されている。

注1 『サイバーベット／ウェブ生命情報論』は、小説と情報論が一冊にまとめられた独特の体裁の本であるが、本稿では叙述の都合上、これから両者を分けて表記することにする。また、小説の『サイバーベット』について主に取り上げる。

注6 『ウェブ生命情報論』の中で、多々納の殺人の動機について、「愛猫を殺されたことへの復讐心だけではない。生命蔑視にたいする義憤でもない。言うまでもなく、自分が狙われているという恐怖心でもない。それは真つ赤に燃えたぎる純粹な激情である。いったい誰が、そんな激情の火付け人なのだろうか？——平先生である」と述べている。この執筆意図を『サイバーベット』に反映させるためには、母親である平先生の人物造形を更に行う必要がある。

注2 一九八〇年代にチリの神経生理学者のH・マトウラーナとF・ヴァアラによって提唱された理論。あらゆる生物は、自らを作り続けていく

注7 生命情報について、『基礎情報学——生命から社会へ』の中で「DNA

／RNAの遺伝情報に限らず、生物にとつて『意味』のあるものはすべて生命情報であり、体内の代謝をつかさどる代謝情報、免疫情報、知覚器官に入ってくる神経情報なども含まれる」と述べている。

注8 石黒武彦は「科学と人文学の交流」（『科学と人文系文化のクロスロー

ド』平20、萌書房）の中で、「生命科学研究に関わる問題の重さを知る科学者たちは、生命を扱うときの倫理について討議する会議をカリフォルニアのアシロマで開いた。一九七五年のことである。科学者らは遺伝子組み換えが人間を含む生命体に及ぼす危険性について議論し、素早く進む研究を研究者たちが倫理的観点に立って自己規制するガイドラインを協議し、研究は安全性を確認した上でなされるべきで、そうでない研究を自粛すべきという意見が出されるなど、自らの社会的責任を問い、研究の自由を制限することについて討議した」と述べている。このような科学者と同様の危機意識が西垣にあると思われる。